

共生社会実現に向けて
今私たちにできること
～パラリンピアンとの交流を通して～

瀧 楓花

日本大学 文理学部 社会福祉学科

心のバリアフリーシンポジウム、 まち歩き調査



アメリカ代表パラリンピアンとまち歩き調査を実施

アメリカ代表パラリンピアンや学生で、まちのバリアフリー調査、心のバリアフリーシンポジウムを開催

(2019年10月)

シンポジウム,まち歩き調査を通して



心のバリアフリーシンポジウムの様子

< 印象に残った点 >

障害当事者と健常者が話し合う場を持つことの大切さ

アメリカ合衆国における障害の「社会モデル」

障害の「社会モデル」について

< 医学モデル >

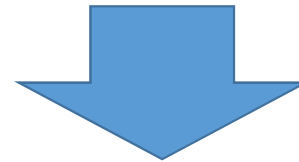
心身の障害を問題だと捉え、治療により障害の改善を図るという考え方

< 社会モデル >

障害は個人にあるのではなく、社会の環境や仕組みが作り出すという考え方

シンポジウム,まち歩き調査を通して

パラスポーツの世界を舞台に活躍するアスリート
健全者の友人と大学生活を送る自分の姿



< 参加者の意識の変化 >

障害者を身近に感じ、ネガティブイメージを
払拭できたのではないか

日本における共生社会について

< 今後求められること >

- 障害者を身近に感じられたり、知るきっかけとなる機会を意識的にもつこと
- 一人一人が相手の立場に立ち、必要な対応を考えること

アメリカ選手団を迎えるにあたって



- 相手の立場になって考えることにチャレンジするきっかけになる
- 暖かな心と相手を尊重する気持ちでお迎えしたい

東京2020大会後に期待すること

- 東京2020大会を契機に市民が気づいたこと、意識の変化が途切れないようにしていくことが大切
- 障害という概念が個人にあるものではなく、社会環境にあるものだという考え方が、より多くの人々の心に根付くことに期待

ご清聴ありがとうございました